

発明文化論

〈第72回〉

丸山 亮

江戸の改暦

国立公文書館で秋の特別展「旗本御家人Ⅲ」を見ながら、江戸の幕臣がいかに有能で、様々な業績を残していたかを知らされた。たとえば天文方の仕事。沖方丁の小説「天地明察」で一躍脚光を浴びた渋川春海の足跡も見ることができる。碁打ちとして名高い安井算哲、のちの渋川春海が成し遂げた改暦の大事業「貞享暦」の実物がある。幕府に呈上された全7巻の自筆本だ。それ以前の日本は、中国唐代の宣明暦を貞観4（862）年に採用して以来、ずっと使い続けてきたため、暦と季節のずれが生じていた。天文学に通じる春海は、元代の授時暦と日本国内の観測結果をもとに大和暦と呼ばれる新暦を作成し、幕府に改暦を上申する。観測の結果、その優れていることが実証されたため、貞享元（1684）年、改暦の宣旨が下り、翌年から貞享暦の施行となった。その年、春海は功績によって幕府の初代天文方に任ぜられている。

貞享暦への改暦で、一般に入手可能なカレンダーとしては大経師暦と呼ばれるものが印刷して販売された。その実物も展示に並んでいる。発行元は朝廷御用表具師の長である大経師で、新暦刊行の権利を与えられていた。冒頭に、御書所、京大経師権之助と発行人が大きく見える。この大経師浜岡権之助は、改暦に伴う全国の暦の発行権を独占しようとして幕府にとがめられ、結局その地位を追われてしまう。

近松門左衛門に「大経師昔暦」と題した作品がある。正徳5（1715）年に大阪の竹本座で初演された人形浄瑠璃で、大経師の妻と手代が下女の仲介で密通し、それが露見して三人とも刑死した実話に基づく。数年前、国立劇場の文楽公演で観たが、ここに貞享新暦の頒布が描かれている。新暦を朝廷や公家方、武家方に配って回る大経師の店のあわただしさ、めでたさが発端だ。近松は前作「賢女手習并新暦」でも貞享暦の始まりを当て込んで書いており、改暦が国中の慶事として受け止められていたことがわかる。

貞享暦以後も幕府による改暦の試みは続く。徳川吉宗は西洋天文学の成果を取り入れた改暦に意欲的だったと伝えられるが、宝暦5（1755）年の宝暦暦は貞享暦のわずかな修正にとどまった。しかし日食の予報を外すなど誤差が目立ちはじめ、幕府はついに寛政7（1795）年、天文学者の高橋至時を天文方に任命し、改暦に当たらせる。こうして完成したのが寛政暦で、寛政10（1798）年に施行された。その報告書「寛政暦書」も展示品のうちにある。高橋至時と仲間たちは清代の「曆象考成後編」を研究したといわれ、その著者ケープラーはドイツ生まれのイエズス会士で、伝道の傍ら中国暦の改良に努めた人物だった。彼の理論は、ヨハネス・ケプラーの楕円軌道で太陽と月の運動を説明するものという。江戸の改暦はこうして中国暦の研究を通じ、西欧理論にも接近していった。

この高橋至時の門下生として有名なのが伊能忠敬だ。忠敬は19歳年下の至時から熱心に暦学や天文学を学び、やがて日本全国の測量に基づく地図の作成に向かうこととなる。忠敬も至時も、緯度1度の子午線の弧長を実証的に求めたいという共通の関心を持っていた。それが忠敬の蝦夷地測量のきっかけになり、至時はその事業を側面から支えたといわれる。

ところで至時は晩年、ジェローム・ラランドの天文書「ラランデ暦書」のオランダ語原書を手にして惑星の運動を理解するに欠かせない書物と感じ、「ラランデ暦書管見」を執筆している。杉田玄白等による「解体新書」の翻訳と同じように、西欧知識の吸収はここでも貪欲になされた。

展示で目を引いたもう一つは、日本暦、英米などのグレゴリオ暦、ロシアのユリウス暦を3段に分けて比較対照した「万国普通暦」というものだ。安政3年と5年の版で、これが出版物として江戸市中に出回っていたことにまず驚く。諸外国との交渉がそれだけ頻繁になってきた事情を反映するのだろう。

（まるやま りょう 共生国際特許事務所 弁理士）